

10月チャレンジ

「ひとり立ち」

子どもは、かなり幼い頃から「自立心」が芽生えているようです。皆さん、ご自身が子どもの頃や子どもさんが幼かった頃を思い出してみてください。母親にしてもらっていたことを「自分でしたい」と言い出したことがあるはずです。まだうまくはできないのに、「自分でスプーンや箸をもって食べようとする」とか「服の脱ぎ着をしようとする」といった簡単なことなどがその例です。これはその子の自立心の芽生えに他なりません。それが自立の第一歩。こんな小さな自立の意識と行動が積み重なり、やがて本当の自立に向かい始めます。

「しっかりと親の愛情を受け、感じ取った子どもほど、自立が早い」といわれています。親から愛情を受けること、親の愛情を感じることほど、子どもが幸せを感じることはありません。親から、十分な愛情を受けると「自分は大切な存在である」とか「自分は価値がある」ということを自然と理解し、自己肯定感の基礎が出来上がります。そのことによって子どもは大きな安心を感じ、自分に自信をもつことができるのです。そしてやる気や勇気が自然とわいてきます。充分な愛情を感じ取って育つ子どもは、そもそも「自分は価値のない人間ではないか」とか、「親は自分を愛しているのか？親から愛されていないのではないか？」という疑問は、ありません。「不安」がなく、無意識のうちに「守られている」とわかっているので、安心して自立することができるのです。

自己肯定感が育まれた子どもは、苦しいことや辛いことがあっても、それを乗り越える力が身に付き、自分のことも他者のことも、認めて受け入れ、そして大切にすることができるようになります。愛情のもと「安心と自信」を感じ、そして「意欲と勇気」をもった子どもは、大きな安心感のもと「自立」していくのです。一方、十分な愛情をもらえなかった子どもは、その欲求が満たされないまま育ち、無意識のうちに自分を認めてほしい、愛してほしいという願望から、依頼心が強かったり、耐性が低かったり、自己中心的で、自分や他者に攻撃的であったり、大切にできなかったりということにつながりやすい傾向もあるようです。

聖書の言葉

「神を見た者は、まだひとりもいない。もしわたしたちが互に愛し合うなら、神はわたしたちのうちにいまし、神の愛がわたしたちのうちに全うされるのである。」

ヨハネ第一の手紙 4章12節

石川三育保育園チャレンジ 北 瞳 夫